

石坂式土器再考

前 迫 亮 一

A Further Consideration on Ishizaka-type Potteries

Maesako Ryoichi

要旨

縄文時代早期前半期の南九州では、貝殻文系の円筒土器文化が盛行する。前平式土器・吉田式土器・石坂式土器に代表されるこの土器群は、昭和20年代に河口貞徳の精力的な調査・研究により型式設定されたものである。ここでは、その中の石坂式土器の範疇について検討し、新古2段階の存在を再確認するとともに、それぞれに石坂Ⅰ式、石坂Ⅱ式という名称を付することを提唱する。

キーワード：石坂式土器、瘤状突起、外反と直行、土器編年の確立

1 はじめに

石坂式土器が型式設定されてから半世紀が経過しようとしている。南九州の縄文土器を代表するものの一つとして、古くから多くの研究者によって取り上げられてきた石坂式土器に関する情報も、大規模開発に伴う発掘調査の増大とともに増加の一途をたどっている。本稿では、まず石坂式土器に関する研究の歩みを詳しく振り返りたい。さらに、新古2段階に分けることの妥当性について検討を行うこととする。

2 石坂式土器研究史

(1) 型式設定 一石坂式土器の誕生一

石坂式土器は、鹿児島県川辺郡知覧町に所在する石坂上遺跡の第四層出土土器を標式とするものである。石坂上遺跡は、古くは塞ノ神式土器の出土遺跡として寺師見國によって紹介された遺跡であるが(寺師 1943)、1953(昭和28)年7月、河口貞徳や河野治雄らによって初めて発掘調査が行われ、『石器時代』1号に掲載された「南九州出土の条痕土器」の中で、その結果が報告された(河口 1995a)。

その冒頭によると、そもそも石坂上遺跡を発掘調査するきっかけとなったのは、河口が京都大学考古学教室において坪井清正に示された“岩川町(現大隅町)狩谷と記された条痕を施した土器”の存在であった。つまり河口は、自身が以前石坂上遺跡で採集した資料の中に、この“条痕を施した土器”が含まれていることを知り、その土器と古くから知られていた塞ノ神式土器との関係を追究する目的で調査に着手したというわけである。

調査結果によると、第三層の褐色砂質土層に塞ノ神式土器、第四層の黒褐色粘土層に条痕土器、両層の境目で山形押捺文土器2片が出土したとある。この第四層出土の条痕土器こそ岩川町狩谷出土の土器と同種の土器であった。河

口はこれを石坂式土器と命名し、その諸特徴を次のように述べている。

「第四層出土の土器は、深鉢型、平底又尖底、縁部は外反し、口縁上面はふくらみをもっている。口縁上面に刻目を印し、頸部に貝殻縁部による斜め、又は羽状の連点文を施し、頸部以下には、貝殻縁部による、綾杉状の条痕を附している」これが初めて世に出た石坂式土器の定義であった。

さて、同論文中にはもう1か所発掘調査の結果が報告されている。それは鹿児島郡吉田村(現吉田町)に所在する大原遺跡のそれである。ここでも石坂式土器が出土しているが、それとは異なるもう一群の円筒土器も出土し、河口はこれを吉田式土器として型式設定を行っている。これら2型式の土器は、第二層(赤褐色土層)と第三層(黒褐色粘土層)の両層から出土するが、出土量と土器片の大小から吉田式土器は第二層に、石坂式土器は第三層にそれぞれの主体があるものと述べている。

以上、石坂上・大原の両遺跡の調査結果をもとに、河口は同論文中の結語で考察を行っている。それによると「石坂式土器は尖底及び平底の二形式を有し、押捺文土器にあっては又出水貝塚の例によれば、丸底及び平底の二形式を有して居り、且つ条痕土器を伴出しているのである。これらの事実によっては未だ押捺文と石坂式との前後関係を断定するには資料が不足であるが、両者がかなり近い編年上の位置にあることはまちがいないまい。」と述べ、石坂式土器を縄文時代早期に位置づけた。さらに、平底文化である吉田式土器と塞ノ神式土器は前期に位置づけられ、層序関係から石坂式→吉田式→塞ノ神式という編年案が提示されたのである。石坂式土器に尖底が含まれるという意識が強かったことがうかがえる。

その後、当時國學院大学院生の大脇直泰が「九州における貝殻文土器について」と題する論文を発表し、貝殻を用